

他利々他深義の研究

森
慶樹

他利々他深義の研究

一、他利の他に就いて

○二義の概観

「他利利他」の内「他利」の「他」は何を指すかに就いては古来二義がある。『仏教大辞彙』の『他利々他』の項目に諸義がまとめてある。これによつて見ると、「利他」の「他」は衆生で異論がないが、「他利」の「他」は衆生か仏かで、二義に分かれる。

大派の慧然師（顕深義記）、深励師は、「他」を衆生とする。

「(二) 若し仏、任運に増上縁となりて衆生其利益を得る名づけて他利とす、仏の自利に對するが故なり。若し仏、他のために発願修行して衆生其恩徳を蒙るを名づけて利他とす、仏が他を利するを以ての故なり。同じく利生の事なれども任運と作願と、自徳と化他と其義異なるが故に造語同じからず、…之れ慧然の論註顕深義記の説なり。」

（『仏教大辞彙第五卷』326頁）

「(三) 自身真如の内熏力を増上縁とし、衆生任運に利を得るを他利と謂ふ。…

深励の論註講述に依るに先づ翼解等の義に二難あり、一には他利と利他と全く立言の左右のみにて、同義

なるが故に、特に仏力を談ぜんがために利他の言を用ひし義に契はず、二には諸経論の造語に違すとは、他・利・の言未だ他を以て仏となす例なし。：

最後に深励の自説を述べて、菩提留支は自利・利他を自利・他利と云へること薩遮尼乾子所説經・勝思惟梵天所問經論等にも見ゆれば他利と利他とは一体の異名にして他とは共に衆生を指し、利は仏が衆生を利益し給ふことなり、： 他を利すと云へば仏が他を利したまへる事にて能・利益の仏の方より云ふ。故に自仏而言宜言利他とあり、他利とは他が利せらると云ふこと、他とは衆生の事ゆゑに所・利益の衆生の方より云ふ言なり」

（『同』 3264～3265頁）

この他、大派の稲葉師や、本派の智暹、大濤和上も同様の義である。一部本派も含むが、他を衆生とする義は、大派の主流の義（慧然、深励、稲葉師）と見てよいだろう。これに対して本派の主流（慧雲・崇廓・道隱和上等）は他を仏とす。

「（一）他利とは他（仏）が我（衆生）を利するを云ふ、即ち他に利せらるゝの意にして従生向仏の名なり。利他とは我（仏）が他（衆生）を利するを云ふ、即ち他を利するの意にして従仏向生の名なり。されば畢竟共に仏、衆生を利益することを顯すものにして従生と従仏とに由て其名別あるなり、故に談ずるに左右ありと云へり。而も淨土論は仏力を談ずることを主とするが故に従仏向生の言を以て利他と称するなりとせり。： 是れ知空の論註翼解、法霖の二門偈窺斑錄、慧然の二門偈大意等の説なり。」

（『同』 3264頁）

「慧雲・崇廓・了空・道隱等ありて、多く翼解・窺斑の説を守り、近くは寛寧・善讓・円月・義山・鮮明等、亦等しくこれに従ふ。」

（『同』 3265頁）

是山和上もまた同様の義である。

「他利と言ふは他の弥陀の為に利益せらるゝこと、衆生よりして仏を謂ひて他となす…

利他と言ふは能く他の衆生を利益すること、仏よりしては衆生を謂ひて他となす…

他利々他は従仏向生と従生向仏との異で、而して他利は衆生の無造作を顕し、利他は仏の造作を示す」

（是山恵覚和上『往生論註講義』259頁）

○大派の義

大派主流の義（他は衆生の義）は、上の『大辞彙』の引文の様に「他利」と「利他」に義の差別を見る。即ち、利他は他利に対してより仏力を詮すると云うのである。略示すれば以下の如し。

・慧然
他利 ∷ 任運

利他 ∷ 作願

・深励
他利 ∷ 所利益

利他 ∷ 能利益

しかるにこの義には、『左右の言に親しからず』との批判が加えられている。

「了空の二門偈参考には他利の他は他力の他の如しとて翼解・窺班の意に従へり。而して其他多く他利と利他との意義に差別を見るものは談の左右と云ふものに親しからずとして之を用ひず。」

（『仏教大辞彙第五卷』 3165頁）

「鮮明の宗要論題には更に論註にては阿弥陀如来為増上縁と定め、二門偈にては願力成就名五念と定めたる上にての他利と利他となれば共に同一義ならざるべからずとなし、他利々他弁の義に就ては左右の言及び自の字義に契はざるのみならず、他利と利他とを優劣に分別するもの的証なき所なり等の破斥を加へたり。」

（『同』 3165～3166頁）

○本派の義

本派主流の義（「他」は仏の義）は、他利と利他の二語の義は同一である。どちらも仏の能利を顕す。ただ従生向仏と従仏向生とによって其名に別があるのみとする。この義は左右の言には親しいが、対して、『義が同一ならば、利他が他利に対してより仏力を顕すことにならないではないか』との批判が加えられることになる。

「深励の論註講述に依るに先づ翼解等の義に二難あり、一には他利と利他と全く立言の左右のみにて同義なるが故に、特に仏力を談ぜんがために利他の言を用ひし義に契はず」

（『同』 3164頁）

両派の義に対する疑難をまとめれば以下の如し。

- ・大派義 … 「左右」の言に相応しない
- ・本派義 … 所詮同じならば、結局どちらも差別無く仏力を顕すことになる

○宗祖の訓より正義を判ずる

では、結局のところ、この二義の中、どちらが妥当かという点、それは即ち本派の義である。何となれば、本典宗祖真筆の坂東本の行巻他力釈を『増補親鸞聖人真蹟集成第一巻』（法蔵館123頁）で見ると、

「他^{トラ}利^ト之^ト与^ト他^ト」
一 二 一

「之ヲ」と「之」が利の目的語となっている。故に、「他利」の「他」は目的語ではなく主語と考えられる。本願寺本を底本とした『聖教全書二』36頁には、

「他^ノ利^ヲ之^レ与^ニ利^ト他^一」

となつていて、より明らかである。

二、他利々他釈の所顕

本派の他利の他を仏とする義が正義であると知られたが、この義には先に述べた問題が残る。他利と利他は同義であり、いずれも仏力を示す。では何故にここに「他利」ではなく「利他」の言を用いるのだろうか。

この問題を考える為に、『論註』の「今將談仏力」の文の内容に就いて、『能談の人』、『能談の文』、『所談の義』を順番に見ていく。

○能談の人

先ず「仏力」を談ずる人、即ち『能談の人』とは天親菩薩である。これに異論はない。『論註』に「是の故に利他を以て之を言ふ。」という。これは『今將に、仏力を談ぜんとす、是の故に論主は浄土論に「利他」の言を以て之を言う」という文意である。即ち、天親菩薩が『浄土論』に於て仏力を談ずるのである。

○能談の文（本派先哲の義）

では『天親菩薩が利他仏力を談じている』と解される「利他」の語の存する文とは、『浄土論』中のどの文であろうか。本派の先哲は、仏力を示す利他の文を直ちに直前の利行満足章の利他とせず、十七句の終、八種功德の終の利他と見ておられる。この仏力を顕す利他を以て、利行満足章の自利利他の本と窺われるのである。

寛寧和上は以下の様に云われている。

「此論に自利他利と云はずして自利々他との給へるものは他力廻向を顕すの思召なりとは何を以て知るやと云ふに、利行満足章の「修五念門行自利利他速得」の文に執ずるときは、一向解せぬことになる。何となれば、かの利行満足章の自利々他の如きは約・末・に・就・いて・示し給へばなり、觀行体相の論文に「此十七種莊嚴成就示現如来自身利益大功徳力成就利益他功德成就故」と、次に仏八種功德を顕し竟つて云く「略説八句示現如来自利利他功德莊嚴次第成就」と云ふ、是等の利他の言は正しく仏・辺・に・就・く、乃ち衆生をして自利々他成就せしむるものは、仏より云はば利他行なり、衆生より云はゞ他利の功德と謂ふべきなり、今は衆生の辺を主にして明す論意に非ずして、仏力廻向の旨を主として明し給ふが故に屢々利他の言を用ひ給ふ、然れば利行満足章に所謂衆生の五念自利々他は皆是れ仏の利益他功德成就の然らしむる所なり」

（真宗叢書二『真宗百論集』下巻 83〜84頁）

義山和上の釈も同様である。

「皆他利利他は一物にして … 他經の上に於て既に然り、今此論の語例も之に同じく、十七句の終、八種功德の終等、利他の言、皆仏の上に於て之をの給ふ」
(真宗叢書二『真宗百論集』下卷 88頁)

○能談の文の再考

謂く。和上方の釈と相違して『能談の文』は、利行満足章の次の『論』の結文の利他であるとすべきである。

「菩薩は是の如く五念門の行を修して自利利他して、速に阿耨多羅三藐三菩提を成就したまへることを得たまへるが故にと。」
(『聖典全書三卷』 423頁)

何故かという、註に「今・將・談・仏・力」と云うが故に、仏力を談ずる文とは、天親菩薩が談ずる直近の『浄土論』の文を指すはずである。何となれば「今・將」の語は『論註』にもう一個所ある。

「此の清浄に二種有と、知るべし。(論)

上の転入句の中に、一法に通じて清浄に入る、清浄に通じて法身に入る。今・將に清浄を別ちて二種を出ださむとする故に、故に言ふところは知るべしと。(註)

何等か二種。一は器世間清浄、二は衆生世間清浄なり。(論)

(『同』 413頁 カッコ筆者)

ここの「今・將に…二種を出ださむ」とは、直前の「此の清浄に二種有と、知るべし。」の『論』文を承けての釈である。直

近の文を承けて釈するが故に「今將に」と云われたのである。これに准じて考えれば、「今將談仏力」も、直前の『論』文である利行満足章の結文の承けての釈と考えるべきである。論主は『今將にこの結文で利他の言を以て仏力を談ずる』のである。故に、能談の文は利行満足章の結文の「利他」の語であり、所談の仏力とは直後の「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」の利益の文がこれを表すことになる。

だが利行満足章の結文の主語は、寛寧和上も指摘するように、仏にではなく菩薩である。即ちこの「利他」は仏ではなく菩薩の利他である。これはどう考えればいいのだろうか。

他利々他の釈の前に、「覈求其本阿弥陀仏為増上縁」と釈される。故に『論註』の他利々他釈は、結文に於て菩薩利他の本源に仏力の利他を見て、これを釈されるのである。これは『浄土論』の蘭林遊戲地門の「本願力回向故」より来たる釈である。浄土菩薩の利他回向の行業は如来の本願力回向をその本とするのである。正にこれこそが「利他」の「深義」なのである。

○他利々他釈の所顕

では何故に「他利」ではなく「利他」の言を用いるのであろうか。「他利」も「利他」も同じく仏力を顕す。「他利」は従生向仏であるが、同様な語として「他力」の語がある。これも「他」は仏力を顕し従生向仏である。しかも「他力」の語は『論註』に何度も用いられているのであるから、従生向仏の語だからとしても、仏力を顕すのに何ら不都合はないはずである。

ではここで試みに『浄土論』の「利他」の言を「他利」に置換してみると、どうなるのであろうか。実際にやってみるとすぐ分かるが、これは文章にならないのである。先ず、次の二文は如来が主語の文である。よってここに他利（他は仏）

の言を置く訳にはいかない。

「如来の自身利益大功徳力成就と利益他功徳成就と示現するが故なり。」（『聖典全書三卷』399〜400頁）

「略して八句を説て、如来の自利利他の功徳莊嚴次第に成就したまへることを示現すと」（『同』408頁）

ではこの『論』の文章を何とか変形してみて、他利の語は用いることが出来るかと云うと、これも難しいと云わざるを得ない。何となれば、これらは仏自身の莊嚴成就を論ずる文であり、衆生より見て（他の）仏の莊嚴成就を論ずる文ではないからである。

次の文章は菩薩が主語である。故にこれらも他利（他は仏）の言を置く訳にはいかない。

「菩薩は出第五門の廻向利益他の行成就したまへりと」（『同』422頁）

「菩薩は是の如く五念門の行を修して自利利他して、速に阿耨多羅三藐三菩提を成就したまへることを得たまへるが故にと。」（『同』423頁）

以上のことから考えるに、他利利他の釈とは、「他利」と「利他」の二語を比較して、『論』の文に於てその使用の適不適を判ずる為のものではないとしなければならない。『何故に他利ではなく利他の言を用いるのか』という疑問自体が間違っているのである。『論』の文に於ては最初から文章的にも文脈的にも、「利他」の語を「他利」と置き換える余地が無いのである。

では他利々他釈の他利利他二語対照の釈は、何の為にこの様な釈を為すのだろうか。次の文は何を表しているのだろ

うか。

「若し自ら仏をして言はゞ、宜しく利他と言ふべし。自ら衆生をして言はゞ、宜しく他利と言ふべし。」

(『同』 424頁)

謂く。これは『論』の中の「利他」の語の意味するところを、殊更丁寧な「他利」という語を出すことによって、対照して理解せしめる釈であると考えるべきである。つまり「利他」の語義を明らかにするために、懇切丁寧に「他利」の語を新たに提出して対照して説明されたにすぎないのである。

このことは『証卷』の往還結釈の文の宗祖の表現から窺うことができる。そこには次の如く「慇懃」の語が使われている。

「宗師は大悲往還の回向を顕示して、慇懃に他利利他の深義を弘宣したまへり。」(『聖典全書』二卷 151頁)

この語はもう一箇所、『正信偈』の西河の三不三信の釈に見える。

「三不三信の誨慇懃にして」

(『同』 63頁)

周知の如く『論註』の讃嘆門に於ては三不信の義のみを示されて、明確に三信の語は出されていない。然し三不信の反対は三信なることは凡そ誰にでも容易に推察できることである。然しながら、三不信に対応する三信の語(淳心・一心・

相続心)を出して、殊更に丁寧に釈されたのが『安樂集』である。このような『安樂集』の釈相を、宗祖を『正信偈』には「慇懃」の語を以て表現された訳である。これに准じて『証卷』の文を窺うと、論註の他利々他の釈も殊更に丁寧な釈と宗祖は見られたと考えられる。

「利他」と「他利」で「他」が示す内容が対立する意味(衆生と仏)になることは、殊更に丁寧に釈されなくとも容易に分かることであるし、本来「利他」の言が主語が仏であることの説明に、無理に「他利」の言を出す必要もない。即ち『論註』の他利々他の釈とは「利他」の対立表現となる「他利」の語を出して、殊更に丁寧に『論』の「利他」の語を釈され、その主語が仏であることを説明したものである。

ではこの菩薩の「利他」であるはずの利行満足章の文が、何故に他利々他対照した時に、仏の「利他」と釈されるのであろうかというに、これは他利々他対照することによって、利他の主語が仏と理解される訳ではない。他利々他の左右を釈す文の直前に「覈に其の本を求むるに、阿弥陀如来を増上縁と為す。」の釈がある。これを承けて次に菩薩の利他の本が仏なることを釈す次第である。『論』が「今將に(菩薩の本たる)仏力を談ぜむとす」るが故に、利他を仏力と釈されるのである。

「答曰く、論言はく、五門の行を修して、自利利他成就するを以ての故なり。然るに覈に其の本を求るに、阿弥陀如来を増上縁と為す。他利と利他と談ずるに左右有り。若し自ら仏をして言はば、宜しく利他と言ふべし
… 今將に仏力を談ぜむとす。是の故に利他を以て之を言ふ。」
(『聖典全書三卷』424頁)

では何故に、『利他』は仏力を示す』とのみ云えばよいところを、『利他』の主語は仏である』という様な凝った釈をされたのだろうか。それはこの『論』当面の文の菩薩の「利他」とは即ち願生行者が往生した後の利他である。この意味

で「利他」の主語は衆生である。しかし『論』は自証教ではなく救済教の論である。救われる側から見た「利他」は浄土菩薩の救済であり、その本は即ち仏の救済である。仏の利他である。この救済の義を示す為に「自ら仏をして言はば、宜しく利他と言ふべし」と救済の仏力を積まれたのである。

以上の解釈によつて、従来されてきた様な、「他利」と「利他」の二の語を比較して、どちらがより他力義を顕わしているかといった論議は、全く不必要にして徒勞なものだったということになる。

○利他の語の意味するところと所談の義

上述の如く、他利他二語を対照する理由には深い意味はない。然るに宗祖はこの他利々他積よつて示される所の義を以て「深義」と云われている。では、宗祖は何故にこれを「深義」と言われるのだろうか。この利他仏力の積によつての如何なる『深い義』が示されるのだろうか。

「他利」の言が対照の為に出されただけの語ということは、他利々他の積は、結局のところ利行満足章の「利他」の内容を積したのみということになる。而してこの積が示す「利他」の内容とは、要するに『仏が衆生を利する』ということである。

先述したように、利行満足章の結文の主語である菩薩の「利他」の本として仏の「利他」がある。これは其の本を求めれば、如来の利他本願力回向である。菩薩が衆生を利益するとは、要するに如来が衆生を利益することである。つまりこの『浄土論』は如来の「本願力回向」の利他力によつて、浄土菩薩の利他回向の活動が住持せられ、これによつて広く衆生を救う（往生せしめる）働きをなすのである。故に『論註』では他利々他の積に続いて、次の様に本願力の積があるのであり、

「凡そ是れ彼の浄土に生と、及び彼の菩薩人天の所起の諸行は、皆阿弥陀如来の本願力に縁るが故へなり。」

（『聖典全書三卷』424頁）

また宗祖は『証卷』に、この如来の本願力回向の活動相を示す「大悲往還回向」の語に続いて、これを「他利利他（利他仏力）の深義」と釈されたのである。

「宗師は大悲往還の回向を顕示して、慇懃に他利利他の深義を弘宣したまへり。」（『聖典全書二卷』151頁）

衆生が往生して、浄土で自利利他成就するが故に速やかに阿耨多羅三藐三菩提を得る。この意味でこの「利他」は衆生が往生後に行ずる利他であるが、衆生が往生するのは、先に往生した菩薩の利他回向門の起行による。然るにその本を云えば、衆生の往生も浄土の起行も皆阿弥陀如来の利他本願力回向に依るのである。

これが『論』の利行満足章の結文「菩薩・自利利他・速得成就阿耨多羅三藐三菩提」の論ずるところの義であり、これが正しく『論註』の「今將談仏力」の所談の深義なのである。（終）